The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ユーラシア東部における佩刀方法の変化について ：エフタルの中央アジア支配の影響
Author(s)	影山, 悦子
Citation	内陸アジア言語の研究. 2015, 30, p. 29-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ユーラシア東部における佩刀方法の変化について
――エフタルの中央アジア支配の影響――

影 山　悦 子

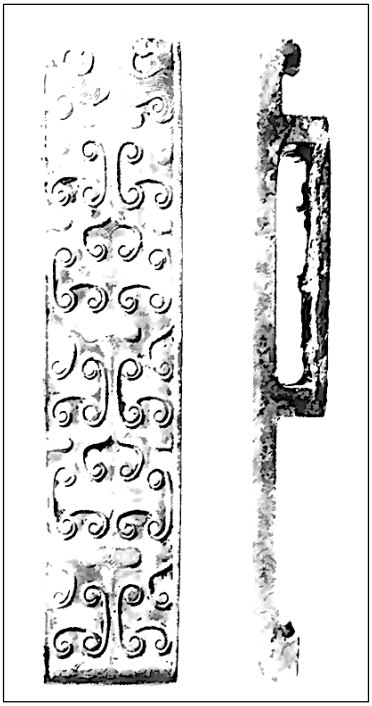
はじめに

東大寺正倉院に伝わる大刀の多くは，鞘の背の二箇所に足金物を備える．足金物に長さの違う二本の紐を通し，それを腰に巻いた帯に留め，刀を斜めに吊るしていた．これは，鞘の腹側に付けたブリッジ状の部品（剣璲（けんすい），scabbard slide）に紐を通して腰からほぼ垂直に吊るす方法に替わって新たに採用された佩刀方法である．本稿では，主に壁画などの図像資料から，この新方式は，エフタルが 5 世紀後半から 6 世紀前半に中央アジアを統一した時に，この地域の定住民の間に広まり，後に中国・日本に伝わった可能性を検討する．

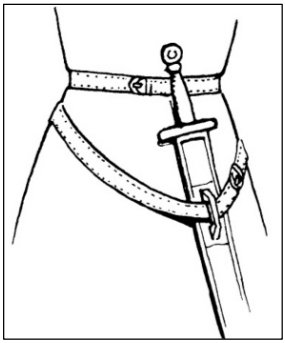
１．W. Trousdale の仮説：エフタルによる新方式導入

1975 年に W. Trousdale はユーラシア大陸で出土した剣璲〔図１〕について包括的な研究を行い，結論部分において次のように述べている．「過去 2500 年間アジアには戦闘用の長剣を佩く主要な方法は二種類しか存在していない．先に現れたのは剣璲を用いる方法である．（中略）アジアでは剣璲を用いる方法は，より有効な二点で吊る方式（two-point suspension system）に替わった．」［Trousdale 1975, p. 118.］．〔図２ａ〕は鞘の腹側に剣璲を取り付け，紐を通して剣を腰からほぼ垂直に下げる方法（以下，剣璲方式と呼ぶ）を示し，〔図２ｂ〕は鞘の背の二箇所に足金物を付けて長さの違う二本の紐で腰から剣を斜めに下げる方法（以下，二点方式と呼ぶ）を示す［Nickel 1973, figs. 4, 5; 田辺

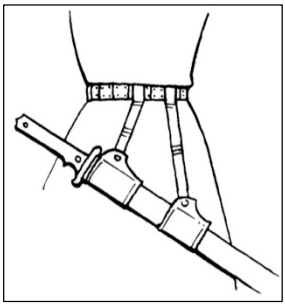
1982]．W. Trousdale は，剣璒方式はクシャーン朝時代のガンダーラの石彫やササン朝ペルシアの初期の銀器に表現されるが，より遅い時代の図像には足金物を用いる二点方式が認められることを示した．そして，この新方式がエフタルの侵略時に中央アジアに導入された可能性を指摘したが，当時の研究状況・資料状況では，エフタル期の使用を示す証拠を挙げることができず，二点方式のエフタル導入説は検証できない仮説にとどまった［Trousdale 1975, p. 95］．



〔図 1〕剣璒（scabbard slide），前漢
［Trousdale 1975, pl. 3b］



〔図 2 a〕剣璒方法
［Nickel 1973, fig. 5］



〔図 2 b〕二点方式
［Nickel 1973, fig. 4］

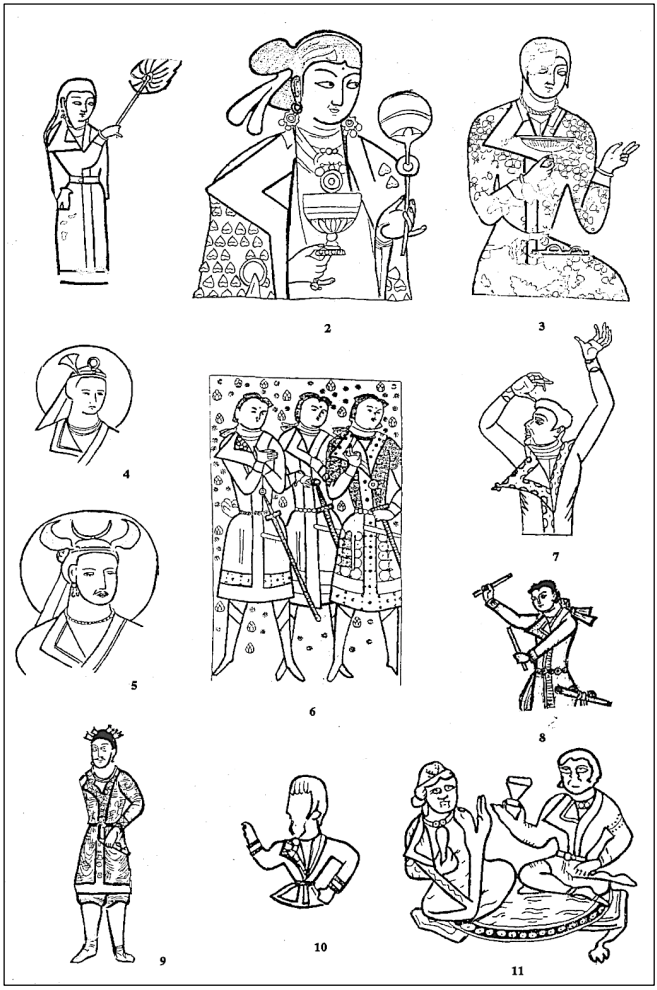
２．エフタルの中央アジア支配に関する最近の研究

近年，様々な分野においてエフタルに関する研究が活発に行われている．いまだに不明な点は多く残されているが，エフタルは 4 世紀半ばに匈奴（フン族）の大規模な移住の波にのって，アルタイから中央アジアに移住し［de la Vaissière 2007, pp. 120-121］，5 世紀半ばにキダーラに替わって中央アジアの支配者となり，一世紀の間中央アジアの大部分（現在のアフガニスタン北部から新疆ウイグル自治区のほぼ全域）を統治したことが明らかにされている．今もコインを除けばエフタルに直接由来する資料はわずかしか知られていない．しかし，最近の研究ではエフタルの勢力圏内に居住した民族の言語や美術の中にエフタルの要素が残されていることが示されている［Yoshida 2004; Il'yasov 2001; 影山 2007; 檜山 2013］．また，貨幣学においては，これまでひとくくりにエフタルとされてきた集団を，「アルハン Alkhan」と「（正統）エフタル (Genuine) Hephthalites」に分けて考えるべきであることが主張されている［宮本・岩井 2013, p. 107］．本稿で検討する図像資料は，ヒンドゥークシュ山脈の北の「（正統）エフタル」が支配した地域のものである．

３．新しい佩刀方法の使用を示す図像資料

佩刀方法が変化する時期を検討する上で，2001 年の J. Il'yasov の論文は特に重要である．この論文は 5 世紀から 8 世紀のバクトリア，バーミヤン，ソグディアナ，クチャの図像資料に同じタイプの冠，服装，髪型が表現されることを示し，それがエフタルによる中央アジア統一の影響であることを明らかにした．エフタル支配期に中央アジアで流行したとされるファッションの一つに，カフタンの右襟だけを折り返す着方がある［Il'yasov 2001, pp. 188-191］．J. Il'yasov が例として挙げた人物像を見ると〔図３〕，半数近くが腰に短剣を帯びる（3：ウズベキスタン南部バラリク・テペ遺跡出土壁画，6：クムトラ石窟第 23 窟，8：クチャ地域出土舎利容器，9：アフガニスタン北部ディルベルジン遺跡出土壁画，11：エルミタージュ美術館所蔵「ストロガノフ銀碗」）．このことから，右襟だけを折り返す着方が流行したエフタル

支配期に，短剣を腰に帯びる習慣も流行した可能性が想起される．さらに，鞘の背の二箇所に半円形の足金物が認められ，帯刀方法は二点方式であることが確認される．



〔図３〕カフタンの右襟だけを折り返して着る人物像［Il'yasov 2001, pl. 2］

同じように二点方式で短剣を帯びる人物像は，5 世紀から 8 世紀のバクトリア(1)，クチャ(2)の他，ソグディアナ(3)，バーミヤン(4)，コータン(5)の絵画資料，さらに中国北部で出土した 6 世紀後半のソグド人の葬具(6)にも認められる．また，鞘の二箇所に足金物を備えた短剣の実物が，韓国とカザフスタンで発見されている［穴沢・馬目 1980, p. 262; 国立慶州博物館 2010］．鞘の先端は扇状に広がり，表面は金と象眼細工で豪華に装飾されている．このような形状の短剣は，ペンジケント遺跡やキジル石窟の壁画，安陽で発見されたと伝わるソグド人葬具浮彫に表現されている(7)．

---

(1) ディルベルジン遺跡出土壁画［Кругликова 1979, figs. 2, 3, 4, 19, 20］，バラリク・テペ遺跡出土壁画［Альбаум 1960, fig. 130; 土居 1971］，アジナ・テペ遺跡出土壁画［田辺・前田 1999, pl. 222］など．

(2) キジル石窟壁画［Grünwedel 1912, fig. 116; The Metropolitan Museum of Art 1982, p. 74, fig. c, no. 107;『キジル石窟』3, pls. 76, 178, 214］，クムトラ石窟壁画［Grünwedel 1912, fig. 53］，クチャ地域出土舎利容器［田辺・前田 1999, pls. 285-287］など．

(3) ジャルテパ II 遺跡出土壁画［Бердимурадов, Самибаев 1999, figs. 122-124］，ペンジケント遺跡出土壁画［田辺・前田 1999, pl. 173; Belenizki 1980, pls. 18-20, 38-40, pp. 111, 118］，アフラシアブ遺跡出土壁画［アリバウム 1980, pls. 6, 7, 10, 27, 29, 30, 32; Raspopova 2006a］，ヴァラフシャ遺跡出土壁画［Шишкин 1963, pl. 14］，カライ・カフカハ I 遺跡出土壁画［Соколовский 2009, figs. 21, 28, 29, 33, 41, 44, 46, 51, 54, 55, 63, 83, 115］など．Распопова 1980, pp. 78-79; Raspopova 2006b も参照．

(4) 田辺・前田 1999, fig. 168.

(5) ダンダン・ウィリク出土板絵［田辺・前田 1999, pl. 258］，バラワステ出土壁画［Gropp 1974, figs. 71, 72］など．

(6) 史君（Wirkak）墓石槨浮彫［西安市文物保護考古研究院・楊軍凱 2014, figs. 84, 85, 96, 97, 124, 125, pl. 30］，安伽墓石棺床浮彫［陝西省考古研究所 2003, pl. 58］など．

(7) キジル石窟の壁画に描かれた剣については，穴沢・馬目 1980; 東京国立博物館 1985, no. 120 参照．ペンジケント遺跡の壁画に描かれた例は，Raspopova 2006a, p. 130, fig. 2，安陽で発見されたと伝わるソグド人の葬具のうち，現在ボストン美術館が所蔵する二枚の石板のうちの一枚は，中央のパネルに，馬に乗り向かって左側に進む墓主を表す．この人物が腰から下げているのはこのタイプの短剣だろう．ただしキジル石窟の例とは異なり，短剣を垂直に下げている．

帯刀するエフタルの首領の姿を表すと考えられる資料は存在するが，佩刀方法は確認できない[(8)]．また，アフガニスタン北部のクンドゥズに近いシャフ・テペ遺跡では百基以上の墳墓が発見され，埋葬方法や副葬品のビザンツ皇帝アナスタシウスⅠ世（491-518 年）の金貨などからエフタルの墳墓であると推定されている［Schlumberger 1964］．短剣や鞘に取り付けられた金具などが出土したと報告されているが，それらの写真も，大きさや形状などの情報も発表されていない．

エフタルが中央アジアを統一すると，支配地域では新しい文化・風俗が共有された．二点方式によって短剣を腰に帯びるのも，エフタル期に広まった新しい習慣の一つであると考えられる．ただし，上で挙げた図像資料の多くは製作年代が確定していないか，エフタル期以降の製作であるため，二点方式の導入時期については検討が必要である．

４．新しい佩刀方法の使用を示すエフタル期の図像資料

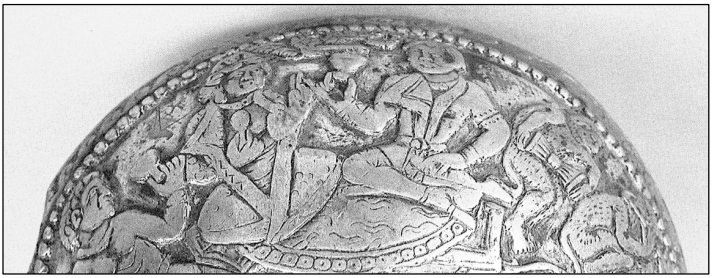
二点方式の使用を示す図像資料には，わずかだがエフタル支配期に製作されたと考えられる資料がある．以下，二種類の資料を取り上げ，二点方式が導入された時期を検討する．

---

(8) 一つは 580 年に長安に埋葬された Wirkak というソグド人の葬具に表現された人物の一人である［西安市文物保護考古研究所・楊軍凱 2014, pp. 119-120, 図 124, 125］．この人物をエフタルの首領と解釈する根拠は，Yoshida 2005, p. 63 参照．しかしながら，この人物が腰から短剣を下げているかどうかは判断できない（この人物の前方に座る Wirkak 本人の腰には短剣とそれを吊るす 2 本の紐が認められる）．2013 年 12 月に西安市博物院においてこの石槨を調査したが，問題の箇所は破損しているように見えた．もう一つは人物像と銘文が陰刻された印章（高さ 22.8mm，幅 19.4mm）である［Callieri 2002, fig. 1］．バクトリア語銘文によって印章の所有者は，もとはエフタルと同じ集団を形成していたアルハンの首領の一人であるヒンギラ（Khingila）本人，もしくは同名の人物であることが明らかにされている［Sims-Williams 2002］．また，カフタンの右襟だけを折り返していることから，この人物はエフタルの首領を表わしている可能性が高いが，印章の図像を考察した P. Callieri はこれをキダーラ期のものとみなしている．男性の腰の近くに剣の柄の部分は見えるが，鞘の部分に金具の表現は認められず，佩刀方法は不明である．

4-1．ストロガノフ家旧蔵銀碗

一つは，エルミタージュ美術館が所蔵するストロガノフ家旧蔵の銀碗である〔図 3:11，図４〕．碗の外側に男女による祝宴の場面等が表されている．男性は腰に短剣を帯び，鞘の背の二箇所に半円形の足金物を確認することができる．鍍金がされる前にソグド語で所有者の名前が刻まれている．この碗の製作地，製作年代には諸説あるが(9)，吉田は銀碗に記された所有者の父親の名前が「フン *xwn*」であることに注目して，この銀碗の製作年代を推定している［Yoshida 2013, p. 382］．すなわち，匈奴を意味する「フン」という民族名がソグド人の人名の一つになったのは，ソグディアナを征服したキダーラが，支配を安定させた後で，ソグド人と融合した結果であるとする É. de la Vaissière の研究をもとに，フンの息子のためにこの銀碗が製作された頃には，既にソグディアナはエフタルの支配下に入っていたと推定している．また，男女ともに上着の右襟だけを折り返している．上で述べたとおり，このような襟の開け方はエフタル期に中央アジアにおいて流行するようになったと考えられている．以上のことから，この銀碗はエフタル支配期の製作である可能性が高く，二点方式がエフタル期に使用されたことを示す証拠になる．



〔図 4〕ストロガノフ家旧蔵銀碗［東京国立博物館 1985, no. 127］

(9) B. I. Marshak は，器形と外側に表現された図像から，この銀碗は 6 世紀末から 7 世紀前半にトハリスタン北部またはソグディアナ南部で製作されたと推定している［東京国立博物館 1985, no. 127 図版解説］．F. Grenet は，5 世紀末または 6 世紀にソグド人の注文によりトハリスタンにおいて製作されたとしている［Rahman, Grenet, Sims-Williams 2006, n. 32］．

4-2．ソグディアナの初期の壁画

もう一方の資料は，ペンジケント遺跡第 II 神殿出土壁画とジャルテパ II 遺跡出土壁画である．

ペンジケント遺跡はサマルカンドの東 60km に位置する都城址である．第 II 神殿の敷地内に建てられた礼拝堂に，犬の頭と鳥の翼を持つ空想上の動物（センムルブ）が支える玉座に座る女神が描かれていた．女神の向かって左側に男性供養者が，右側に女性供養者が立ち，さらにこの女性供養者の後方（右側）に，少なくとも 4 人の男性供養者が横一列に並んでいた(10)．全身が残っている 2 人の男性供養者は，膝丈のカフタンを着て，その下にズボンをはき，ズボンの裾をブーツの中に入れている〔図５〕．鞘の二箇所に方形の足金物を備えた短剣を帯びる．後にこの壁画を覆うように新たな壁が建てられた．発掘者は，その壁の中に含まれていた土器片の年代などを根拠に，この壁画は 5 世紀末から 6 世紀初めに製作されたと推定し，ペンジケント遺跡で発見された最も古い壁画であるとしている(11)．

ジャルテパ II 遺跡はサマルカンドの東 43km に位置する神殿址である．発掘者によれば，この神殿には改築の痕跡が認められ，それによって神殿が機能していた時代を第 1 期から第 5 期に区分することができる．足金物付き短剣を下げた供養者の壁画は第 4 期に属し，5 世紀から 6 世紀前半の製作であると推定されている〔図６〕．さらに，上で挙げたペンジケント遺跡出土の供養者像よりも表現が古風であるとし，5 世紀の可能性が高いとしている(12)．

ペンジケント遺跡の供養者像と類似する壁画がアフガニスタン北部のディルベルジン遺跡で発見されている〔図７〕．ディルベルジン遺跡の壁画に描かれている衣服や武器のような当時実際に使用されていた物と，ペンジケント遺跡の 5～6 世紀の壁画に描かれている物との類似性が指摘されている［Belenitskii, Marshak 1981, p. 50］．バクトリアの壁画とソグディアナの壁画に類似性が認められる要因として，キダーラによるソグディアナ支配が想定

(10) B. I. Marshak, nos. 45, 46 in Sims 2002, pp. 127-128.
(11) Belenitskii, Marshak 1981, p. 40.
(12) Бердимурадов, Самиваев 1999, pp. 54-58, figs. 122-124

されている［Грене, Рапен 2013, p. 26］．キダーラはエフタルと同様に，4 世紀半ばに匈奴（フン族）とともにバクトリアに移住したと推定されている．440 年頃にヒンドゥークシュの南北を統一するが，その後エフタルが強大化すると，キダーラは南北二つの勢力に分裂し，衰退したと考えられている．

ペンジケント遺跡の供養者に類似する図像は，クチャ地域の仏教石窟にも見出すことができる〔図８〕．服装や姿勢がほぼ同じ供養者が横一列に並ぶ構図，つま先を立てているように見える足先の表現，背景に蓮華のつぼみらしきものを散らす点，さらに下部の装飾帯の文様も共通する(13)．これらの共通点を偶然の一致とみなすことはできないだろう．バクトリアとソグディアナだけでなくタリム盆地北縁のクチャ地域において，しかも異なる宗教を背景とする美術において，供養者像の表現が類似している(14)．地域的・宗教的な隔たりを越えて表現方法が共有された背景には，これらの地域を政治的に統一した勢力の存在が想定され，その勢力はキダーラではなく，タリム盆地周辺をも支配下に治めたエフタルであると考えるべきである．キジル石窟第 8 窟の壁画の製作年代は，E. Waldshmidt による編年を踏襲し，7 世紀前半とする研究者が多いが［The Metropolitan Museum of Art 1982, no. 107; Sims 2002, pp. 128-129］，6 世紀前半とする研究者もいる(15)．

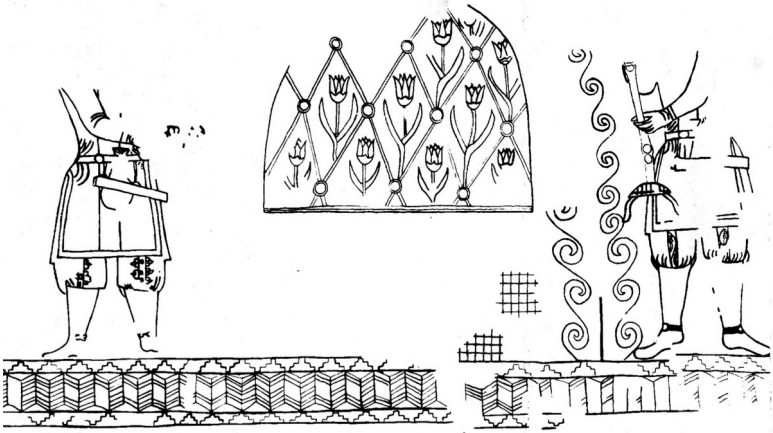
---

(13) キジル石窟第 8 窟の他，同石窟第 198 窟，クムトラ石窟第 23 窟の供養者もこのような特徴を持つ．キジル石窟第 8 窟の供養者像については，井上 2007，クチャ地域の供養者像については，中川原 1999 参照．

(14) クチャでは世俗の供養者と並んで供養比丘がしばしば描かれるが，比丘がつま先を立てているように表現されることはない．このことは，つま先立ちの表現の起源が仏教美術ではなく，他の美術にあることを示唆するように思われる．

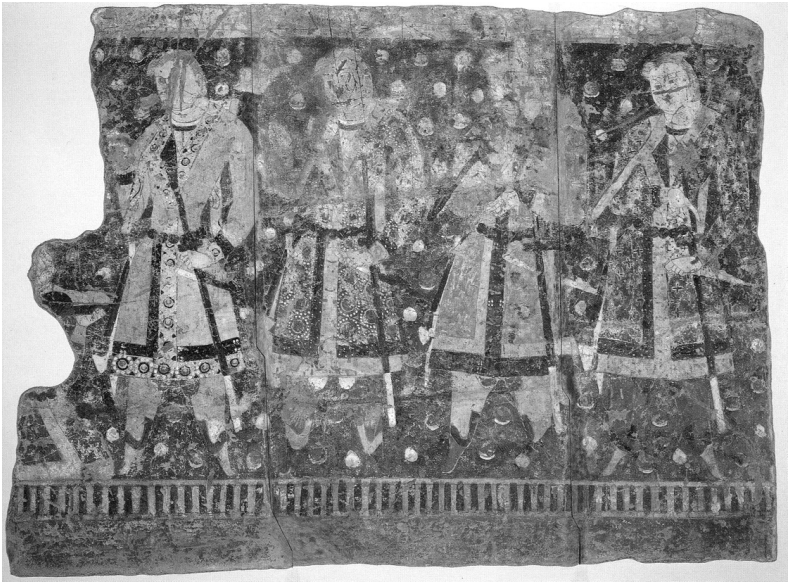
(15) M. Klimburg による推定［Yaldiz 2010, p. 1038 参照］．インド美術館がキジル石窟第 8 窟の供養者像を表わす断片（MIK III 8691）に対して行った放射性炭素年代の測定結果（432 年～538 年）も早い年代を支持する［Yaldiz 2000, no. 328; Yaldiz 2010, p. 1038］．ただし，日本と中国の研究機関による同窟内壁画の放射性炭素年代の測定では異なる結果が出ている（日本：2 世紀初～3 世紀初，中国：6 世紀半ば～7 世紀半ば）［中川原・谷口 2012, pp. 131-132］．

〔図５〕ペンジケント遺跡出土壁画，供養者［田辺・前田 1999, pl. 173］

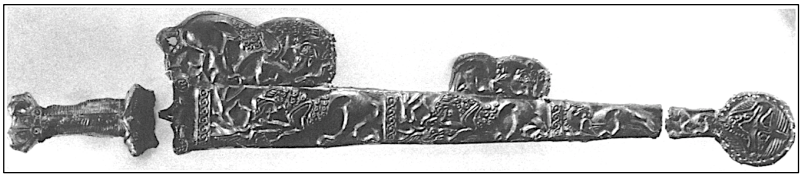


〔図６〕ジャルテパ II 遺跡出土壁画，供養者
［Берудимурадов, Самибаев 1999, fig. 122］

〔図７〕ディルベルジン遺跡出土壁画，供養者［Кругликова 1979, fig. 2］



〔図８〕キジル石窟第８窟壁画，供養者［Sims 2002, no. 47］



〔図９〕ソロハ古墳出土長剣［Nickel 1973, fig. 14］

上で述べたとおり，ジャルテパ II 遺跡，ペンジケント遺跡の供養者像の制作時期は，考古学的な見地から5世紀から6世紀に遡ることが示されている．類例がクチャ地域にも存在することから，それらはキダーラ期ではなくエフタル期に製作されたと考えるのが妥当である．したがって，ジャルテパ II 遺跡とペンジケント遺跡第 II 神殿の供養者像は，二点方式がエフタル期にソグディアナに導入されたことを示す証拠とみなすことができる．

ソグディアナがエフタルの支配下に入った正確な年代は確定していない．しかし，ソグディアナから北魏に朝貢する国の名前が突然変化することに着目し，それが支配勢力の交替を示しているとみなし，ソグディアナは 480 年頃または 510 年頃にエフタルの支配下に入ったと考えられている(16)．

筆者は新しい佩刀方法が中央アジアに広まったのはエフタル期だと考えるが，この方式はエフタルの中央アジア支配よりも千年程前から使用されていたようである．ウクライナのドニエプル河下流のソロハ古墳で足金物を二箇所につけた長剣（長さ 70cm）が発見され〔図９〕，スキタイ時代の前 5 世紀から前 4 世紀に現地で製作されたと考えられている(17)．この一例だけで判

(16) 桑山は 509 年を最後にサマルカンド（悉萬斤）から北魏への朝貢が途絶えることに注目し，この頃にサマルカンドはエフタルの影響下に入ったと推定する［Kuwayama 1989, pp. 117-118］．F. Grenet はこの説に従っている［Grenet 2002, p. 211］．一方，É. de la Vaissière は，むしろソグド（粟特）から北魏への朝貢が途絶える 479 年に注目すべきであるとし，この頃エフタルがソグディアナを支配した可能性を検討している［la Vaissière 2007, pp. 127-129］．

(17) Манцевич 1987, nos. 48, 49, pp. 68-71; Nickel 1973, fig. 14. H. Nickel は前 3 世紀から前 2 世紀の製作としている．

断することはできないが，北方のステップ地域の遊牧民の間で古くから知られていた二点方式が，アルタイから移動して中央アジアを支配したエフタルを介し，中央アジアの定住民の間に広まった可能性を考えておきたい．

5．二点方式の長剣への応用

5-1．ソグディアナ・コータン

ソグディアナやコータンなどで発見された 7 世紀から 8 世紀の図像資料には，二点方式によって長剣を佩く人物が認められる[(18)]．W. Trousdale が示したとおり，二点方式は剣璲方式に替わって長剣を佩く主要な方法となるが，それは，短剣を佩く方式としてエフタルによって中央アジアに導入された二点方式が後に長剣に応用された結果であると考えられる．二点方式が長剣に応用された時期がエフタル支配期であるか，それ以降であるかは，中央アジア出土資料からは判断できないが，以下に挙げる中国出土資料はこの方式が 6 世紀半ばに長剣の佩刀方法として使用されていたことを示す．

ただし，ソグディアナでは，7 世紀以降の資料にも剣璲方式を用いて剣を佩く人物像が多数認められる．7 世紀半ばに製作されたアフラシアブの壁画では，西壁の突厥人，中国・朝鮮からの使節は，二点方式によって剣を佩くのに対して，南壁のソグド人と推定される人々は，剣璲方式で剣を佩いている〔図 10〕［Альбаум 1975, pls. 23, 27, 29, 30］．また，ペンジケント遺跡とカライ・カフカハ I 遺跡の壁画のうち，最も遅い 8 世紀半ばに描かれた壁画では，二点方式よりも剣璲方式の方が圧倒的に多く認められる［Беленицкий, Пиотровский 1959, pl. 8; Соколовский 2009, figs. 21, 37, 44, 49, 55, 63, 115, 126］．これらの壁画の大部分は物語や神話を表現している．そのため，過去の出来事であることを示すためにあえて旧式の佩刀方法が示されたとする解釈がある［Raspopova 2006a; Arzhantseva, Inevatkina 2006］．

---

(18) Якубовский, Дьяконов 1954, pls. 7, 9, 10, 12; Sims 2002, nos. 12, 13, 21, 132, 199. 興味深いことに，クチャ地域では，二点方式は短剣にのみ使用され，長剣には他の方式（おそらく剣璲方式）が使用されている．

〔図 10〕アフラシアブ遺跡出土壁画（模写）[東京国立博物館 1985, no. 93]

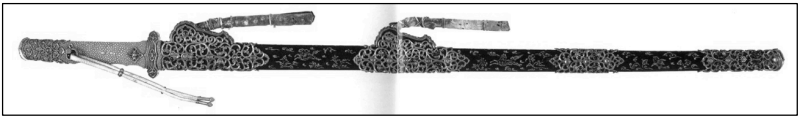
6 世紀半ばに描かれたとされるバーミヤン東大仏壁龕の天井画でも，神格は剣璲方式で剣を佩いている［Klimburg-Salter 2008, pp. 135, 140］．またフォンドゥキスタンの壁画は 2 人の戦士を表わし，一方は剣璲方式によって，もう一方は二点方式によって長剣を佩いている［Trousdale 1975, fig. 64］．

したがって，二点方式導入後も剣璲方式は消滅せず，二つの方式が共存した可能性もある．

5-2．中国・日本

寧夏回族自治区固原西郊の北周李賢墓（569 年没）で，鞘の二箇所に足金物を備えた長剣の実物（長さ 87cm）が発見されている[19]．同じタイプの長剣は山西省太原の徐顕秀墓（571 年没）の壁画や，安陽で出土したと伝えられるソグド人葬具の浮彫に表現されている［太原市文物考古研究所 2005, pl. 7; Juliano, Lerner 2001b, fig. 1］．これらの資料は，早くも 6 世紀半ばには中国北部に二点方式が長剣を佩く方法として伝わったことを示している．

冒頭でも述べたとおり，正倉院に伝わる長剣の多くは鞘の二箇所に足金物を備えている〔図 11〕．国家珍宝帳には唐大刀 13 点，唐様大刀 6 点が記載され，唐大刀は中国製，唐様大刀は日本製と考えられている［西川 2009, figs. 11-18, pp. 20-23, 33-60］．このことから，唐代には長剣の標準的な佩刀方法として定着していた二点方式が，日本に伝わり，普及したことがうかがえる．



〔図 11〕東大寺正倉院所蔵，唐大刀［西川 2009, fig. 11］

(19) B. I. Marshak, “Sword in its scabbard” in Juliano, Lerner, 2001a, pp. 102-103.

おわりに

本稿では中央アジアの図像資料をもとに，鞘の二箇所に足金物を取り付けて二本の紐で短剣を下げる方式（二点方式）は，エフタル期に支配地域に広まったことを示した．これまでの研究により，特徴的な冠や服飾，髪型がエフタル支配期に流行したことが確認されているが，短剣を腰に帯びる習慣も同時期に広まったと考えられる．二点方式は後に長剣にも応用されるようになり，中国，日本に伝わった．ササン朝ペルシアや突厥でも二点方式は使用されたが，伝播した時代や経路については検討することができなかった．今後の課題としたい．

参考文献

穴沢咏光・馬目順一　1980　「慶州鶏林路 14 号墓出土の嵌玉金装短剣をめぐる諸問題」『古文化談叢』7, pp. 245-278.

アリバウム, L. I.（加藤九祚訳）　1980　『古代サマルカンドの壁画』文化出版局.

井上　豪　2007　「キジル第 8 窟寄進者像の服飾に関する諸問題」『秋田公立美術工芸短期大学紀要』12, pp. 33-47.

影山悦子　2007　「中国新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠：エフタルの中央アジア支配の影響」『オリエント』50-2, pp. 120-140.

『キジル石窟』　新疆ウイグル自治区文物管理委員会・拜城県キジル千仏洞文物保管所（編）『中国石窟 キジル石窟』1-3 巻，平凡社，1983-1985 年.

田辺勝美　1982　「タク・イブスターン大洞彫刻研究――図像学およびイコノロジー的試論――」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』2, pp. 61-113.

田辺勝美・前田耕作　1999　『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』小学館.

土居淑子　1971　「中央アジア出土バラルィク・テペの壁画」『国華』937, pp. 3-17.

東京国立博物館（他編）　1985　『シルクロードの遺宝――古代・中世の東西文化交流――』日本経済新聞社.

中川原育子　1999　「クチャ地域の供養者像に関する考察――キジルにおける供養者像の展開を中心に――」『名古屋大学文学部研究論集』135, pp. 1-32.

中川原育子・谷口陽子（他） 2012 「ベルリン・アジア美術館所蔵のキジル将来壁画の放射性炭素年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』23, pp. 127-137.

西川明彦 2009 『日本の美術 523 正倉院の武器・武具・馬具』至文堂.

檜山智美 2013 「クチャの第一様式壁画に見られるエフタル期のモチーフについて」『ガンダーラ・クチャの仏教と美術：シルクロードの仏教文化，ガンダーラ・クチャ・トルファン』pp. 143-163.

宮本亮一・岩井俊平 2013 〔書評〕M. Alram, D. Klimburg-Salter, M. Inaba, M. Pfisterer (eds.), *Coins, art and chronology 2. The first millennium C. E. in the Indo-Iranian borderlands,* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2010. 『西南アジア研究』78, pp. 106-126.

太原市文物考古研究所（編） 2005 『北斉徐顕秀墓』北京.

陝西省考古研究所（編著） 2003 『西安北周安伽墓』北京.

西安市文物保護考古研究院（編著）・楊軍凱（著） 2014 『北周史君墓』北京.

国立慶州博物館 2010 『慶州鶏林路 14 号墓』（国立慶州博物館学術調査報告 22）.

Arzhantseva, I. A., O. N. Inevatkina 2006, “Iranian people depicted in Afrasiab wall painting (7th century AD)”, A. Panaino, A. Piras (ed.), *Proceedings of the 5th conference of the Societas Iranologica Europæa held in Ravenna, 6-11 October 2003*, vol. 1: Ancient & Middle Iranian studies, Milano, pp. 307-318.

Belenizki, A. M. 1980, *Mittelasien, Kunst der Sogden,* Leipzig.

Belenitskii, A. M., B. I. Marshak 1981, “The painting of Sogdiana”, in G. Azarpay, *Sogdian painting: The pictorial epic in Oriental Art,* with contributions by A. M. Belenitskii, B. I. Marshak, and M. J. Dresden, Berkeley, Los Angeles, London, pp. 11-77.

Callieri, P. 2002, “The Bactrian seal of Khiṅgila”, *Silk Road Art and Archaeology* 8, pp. 121-141.

Gropp, G. 1974, *Archäologische Funde aus Khotan Chinesisch-Ostturkestan*, Bremen.

Grünwedel, A. 1912, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin (reprint 1998).

Harper, P. O., P. Meyers 1981, *Silver vessels of the Sasanian period, volume one: royal imagery,* New York.

Il'yasov, J. 2001, "The Hephthalite Terracotta", *Silk Road Art and Archaeology* 7, pp. 187-200.

Juliano A. L., J. A. Lerner (eds.) 2001a, *Monks and merchants: Silk Road treasures from northwest China*, New York.

Juliano, A. L., J. A. Lerner 2001b, "The Miho couch revisited in light of recent discoveries", *Orientations* October 2001, pp. 54-61.

Klimburg-Salter, D. 2008, "Buddhist painting in the Hindu Kush ca. VIIth to Xth centuries", É. de la Vaissière (ed.), *Islamisation de l'Asie central: Processus locaux d'acculturation du VIIe au XIe siècle*, Paris, pp. 131-159.

Kuwayama, Sh. 1989, "The Hephthalites in Tokharistan and Northwest India", *Zinbun* 24, pp. 89-134.

la Vaissière, É. de 2007, "Is there a "Nationality of the Hephthalites"?", *Bulletin of the Asia Institute*, 17(2003) [2007], pp. 119-132.

The Metropolitan Museum of Art 1982, *Along the ancient Silk Routes. Central Asian art from the West Berlin State Museums*, New York.

Nickel, H. 1973, "About the sword of the Huns and the "Urepos" of the Steppes", *Metropolitan Museum Journal* 7, pp. 131-142.

ur Rahman, A., F. Grenet, N. Sims-Williams 2006, "A Hunnish Kushan-shah", *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 1, pp. 125-131.

Raspopova, V. I. 2006a, "Ethnos and weaponry in the murals of Afrasiab", M. Compareti, É. de la Vaissière (eds.), *Royal naurūz in Samarkand*, Pisa/Rome, pp. 129-145.

Raspopova, V. I. 2006b, "Sogdian arms and armour in the period of the great migrations", M. Mode, J. Tubach (eds.) *Arms and armour as indicators of cultural transfer: the steppes and the ancient world from Hellenistic times to the early Middle Ages,* Wiesbaden, pp. 79-95.

Schlumberger, D. 1964, "La nécropole de Shakh Tépé près de Qunduz", *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 1964, pp. 207-211.

Sims, E. (ed.) 2002, *Peerless images: Persian painting and its sources,* New Haven, London.

Sims-Williams, N. 2002, "The Bactrian inscription on the seal of Khiṅgila", *Silk Road Art and Archaeology* 8, pp. 143-148.

Trousdale, W. 1975, *The long sword and scabbard slide in Asia,* Smithonian contributions to anthropology 17, Washington, D.C.

Yaldiz, M 2010, “Evaluation of the chronology of the murals in Kizil, Kucha oasis”, E. Franco, M. Zin (eds), *From Turfan to Ajanta,* Rupandehi.

Yaldiz, M. et al. (eds.) 2000, *Magische Götterwelten. Werke aus dem Museum für Indische Kunst, Berlin*, Potsdam.

Yoshida, Y. 2004, “Some reflections about the origin of *čamūk*”, 森安孝夫（編）『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, pp. 127-135.

Yoshida, Y. 2005, “The Sogdian version of the new Xi’an inscription”, É. de la Vaissière, É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, pp. 58-72.

Yoshida, Y. 2013, “When did Sogdians begin to write vertically?”, *Tokyo University Linguistic Papers* 33, pp. 375-394.

Альбаум, Л. И. 1960, *Балалык-тепе. К истории материальной культуры и искусства Тохаристана,* Ташкент.

Альбаум, Л. И. 1975, *Живопись Афрасиаба*, Ташкент.

Беленицкий, А. М., Б. Б. Пиотровский 1959, *Скульптура и живопись древнего Пянджикента*, Москва.

Берудимурадов, А. Э., М. К. Самибаев 1999, *Храм Джартепа*, Ташкент.

Грене, Ф., К. Рапен 2013, “Формационные этапы согдийской культуры”, *Согдийцы, их предшественники, современники и наследники*, Санкт-Петербург, pp. 13-28.

Кругликова, И. Т. 1979, “Настенные росписи в помещении 16 северо-восточного культового комплекса Дильберджина”, *Древняя Бактрия 2. Материалы Советско-Афганской археологической экспедиции,* Москва, pp. 120-145.

Манцевич, А. П. 1987, *Курган Солоха*, Ленинград.

Распопова, В. И. 1980, *Металические изделия раннесредневекового Согда*, Ленинград.

Соколовский, В. М. 2009, *Монументальная живопись дворцового комплекса Бунджиката,* Санкт-Петербург.

Шишкин, В. А. 1963, *Варахша*, Москва.

Якубовский, А. Ю., М. М. Дьяконов (eds.)1954, *Живопись древнего Пянджикента*, Москва.

〔付記〕本研究は JSPS 科研費 26370146 の助成を受けたものである．